宮林 英子
Miyabayashi Eiko

真庭人
MANIWABITO

鳥の声が聞こえてくるということ

昭和49年の春、東京から落合に引っ越してきた宮林英子さん。すごく鳥の声が聞こえてきて衝撃を受けたと言います。当時の落合は開発が進み始めていましたが、昔からの田畑や自然がまだ多く残っていたそうです。鳥に興味を持ち、昭和52年に作州野鳥の会に入会した宮林さんは、高梁川の河口に行き、4千羽を超えるシギ・チドリの群れに感動したと言います。しかし数年後に再び訪れると、見つけられたのはたった25羽。ヘドロがたまって餌となるゴカイなどがいなくなり、来なくなったというのです。「餌がないというのはこんなに大きなことなのかと初めて理解しました。考えたら、鳥のさえずりであふれる森は、広葉樹林に下草がいっぱい、そこにさまざまな虫が集まる。その虫を餌とするさまざまな鳥が集まっていたんだなと気付きました。そんな森から水が湧いて沢となり、川の源流域となる、その全部がつながった瞬間でした」。それからは、鳥を切り口に自然の壮大な仕組みを学び伝えることがライフワークに。平成5年に落合野鳥の会を立ち上げ、定期的に探鳥会を開催しながら、小学校へ出向いて自然観察会をしているそうです。今年で30年を迎え、18人だった会員は現在75人に。会報誌「やませみ」も第156号を発行したそうです。

落合の文化をまちかどで感じて

「落合は、ゆったりとしたとても文化度が高い町」と宮林さん。「越してきたばかりの頃、隣家のおばあさんが豆の種を分けてくれて、『一粒は畑の神様に、一粒は土の中の虫たちに、そして一粒はどうぞ私のために、と言うて、3粒ずつまくんよ』と教えてくれて」。なんと心が豊かなんだろうと驚いたそうです。

落合では、平成16年からまちかど展覧会が開かれています。誰もが自分の責任で自由に参加できる展覧会をと始まったまちかど展覧会も、今年で20回目を迎えます。初回から竹を使った作品で参加している宮林さんは、3年前から実行委員会会長としても関わっています。「落合のあちこちで開かれる展覧会を楽しんでくださいね」と話してくれました。

まちかど展覧会作品
『はらぺこあおむし』（垂水神社）

毛無山探鳥会

宮林英子さん（下方）

1947年長崎県生まれ。1974年に父親の出身地である真庭へ。1993年に落合野鳥の会を設立。いつも周りの人たちに恵まれていることに感謝と幸せを感じている。草月流いけばな教室主宰。落合野鳥の会会長、落合文化協会会長、落合まちかど展覧会実行委員会会長、日本鳥類保護連盟岡山県支部長。

まにわびと
46
2023